

要約

芸術普及(アウトリーチ)活動はこれからの地域文化施設の鍵をにぎる事業である

◎ アウトリーチ活動のすすめ その1

芸術普及活動には、次の効果がある。

1. 子どもや家族連れがやってくる(観客の育成と集客)
2. 子どももおとなも生き生きする(教育的な効果)
3. 行政や地域の賛同が得られる(社会的な評価の向上)

◎ アウトリーチ活動のすすめ その2

芸術普及活動に必要なものは、

1. 担当者のやる気と組織の理解
2. アイディアと知恵
3. 地域や市民とのネットワーク
4. アーティストや芸術団体の協力

であり、比較的小さな予算規模で実現が可能である。

◎ アウトリーチ活動のすすめ その3

芸術普及活動は、まちづくり、ひとづくりそのものである。

芸術普及活動の導入と位置づけ

- 地域文化施設における芸術普及活動の取り組みは比較的新しく、調査対象の7割以上が90年以降に導入しているが、美術館では、約半分以上が90年以前から実施するなど、劇場・ホールより教育普及活動の歴史が長い。
- 普及活動導入の背景や目的は、もともと施設の設置目的に含まれているから、芸術に触れる機会の少ない市民や地域に芸術を普及するため、これからの文化施設では従来型の公演や展覧会だけでは不十分だから、といったものが多い。
- 芸術普及活動は、文化施設全体の目的や方針に明確に位置づけられているケースがある一方で、担当者の個々の問題意識や取り組みだけに依存している例もある。

芸術普及活動の内容

- 芸術普及活動の具体的な内容は、事業の対象や形態、手法などによって多種多様で、アンケート調査のために分類した8タイプの事業の中では、「子ども、青少年、親子向け鑑賞事業」、「体験・創作型ワークショップ」、「教養型セミナー・講座事業」、「地域派遣型事業」、「解説付き鑑賞事業」などが、半数以上の施設で実施されている。
- 個々の事業はそれらを組み合わせる形で実施されているものが多いが、特徴的な傾向は次のとおりである。

1. 子どもを対象とした事業、学校と連携した事業

- 子どもを対象とした芸術普及活動は、もっとも多くの施設で実施されている。
- 劇場・ホールにおける従来型の子どもの鑑賞事業と異なる点は、少人数を対象としたものであること、ワークショップやワークブックなど体験・鑑賞のためのツールや手法が用意されていること、アーティストや作品により身近な形で触れられること、必ずしも作品の鑑賞だけを目的としていないこと、などであり、より深い芸術的な体験を子どもたちにもたらしている。
- 学校との連携方法としては、文化施設が、学校にアーティストを派遣したり、アートカードなど事前の準備ツールを用意するなどの工夫がみられるとともに、教師に対するプログラム内容の事前説明、あるいは教師向けのプログラムを用意する施設もある。
- こども向けのプログラムは、小学生と中学生、低学年と高学年など、年齢によって受け取り方や感じ方がまったく異なるため、対象年齢を念頭にいたプログラムの開発が重要である。

2. 高齢者・障害者を対象とした事業

- 福祉施設や病院などにアーティストを派遣したり、視覚や聴覚に障害のある市民向けのプログラムに取り組むなど、福祉・医療的な要素を持った芸術普及活動を実施する施設もある。
- こうした取り組みは、これまで文化施設に関係の薄かった市民への普及活動として重要な意味を有しているが、プログラムの企画や実施に際しては、福祉や医療の専門家、あるいはこうしたプログラムの経験や実績のあるアーティストなどの協力が必要である。

3. 市民参加型事業からの発展と連携

- 劇場やホールでは、市民参加型事業が発展する形で、地元の劇団や市民による芸術普及活動に取り組むケースもある。市民の参加によって得られた成果を、市民自らの手で、地域や他の市民に還元・普及させようというもので、劇場やホールを媒介にした循環型の普及活動として注目できる。

4. 芸術普及活動の手法

- ワークショップは、芸術普及活動ではもっとも頻繁に使われる事業手法で、参加者が、より深いレベルで芸術を体験・理解できるという点で、有効である。
- 美術館では、教育普及事業のツールとして作品鑑賞のためのワークシートやカードなどを用意する例が多いが、劇場・ホールではまだ限られている。
- さらにアーティストを学校や地域に派遣する「派遣型事業」も、芸術普及活動に特徴的なスタイルである。文化施設の中だけではなく、施設の活動を地域や市民に開き、立地に関係なく活動の対象を広げるためには有効な方法である。

芸術普及活動の運営

1. 運営体制

- 芸術普及活動の専任者を設置する施設は限られており、企画担当者や学芸員が兼務しているケースが多い。
- 芸術普及活動の担当者は総じて熱心で、その問題意識や前向きな姿勢が芸術普及活動の推進力となっているが、一方では、組織全体の中での普及活動の位置づけが曖昧だったり、普及活動に対する施設全体の運営方針が定まっていないケースもある。
- そうした中で、地元アーティストやボランティアなどの市民と協力して、芸術普及活動を円滑に実施するための体制づくりをしているところもある。
- 芸術普及活動を円滑に実施するためには、地域や市民のニーズを把握し、アーティストや芸術団体の協力を得ながら、活動を生み出していくオーガナイザー的な役割が重要である。

2. 自治体への理解促進(インリーチ活動)

- 文化施設の予算が減少傾向にある中で、芸術普及活動を実施するためには、施設を所管する行政内部の理解を得るための働きかけ(インリーチ活動)が重要である。
- 子どもや一般市民に広く芸術を普及する活動は、公演や展覧会と比較して予算措置に理解が得やすい、というコメントが複数の施設から寄せられるなど、芸術普及活動は、インリーチ活動にとっても有効な素材となる。

3. 学校との連携

- 学校と連携した事業を積極的に実施しているところでは、学芸員やホール担当者が個々のネットワークの中で始めるケースも多いが、教育委員会や校長会といった組織の理解を得ることが必要である。
- プログラムの意味や内容を学校側に理解してもらうためには、教師に事前に内容を十分伝えるだけでなく、ワークショップなどの現場を視察してもらい、子どもたちの生き生きした表情を見てもらうのが、一番効果がある。
- 教育指導要領の改訂や総合的学習の時間、鑑賞の時間の導入は、文化施設と学校が連携し、文化施設独自の教育プログラムを立ち上げるチャンスである。

4. アーティストとの連携、専門的人材の育成

- 芸術普及活動の実施に際しては、ほとんどの施設が何らかの形でアーティストの協力を得ており、特定のアーティストと長期的、継続的な関係を築いているところも多い。
- とくに、劇場やホールでは、美術館の常設展やコレクションに相当するものがないため、演奏者や演出家、俳優などのアーティストとの連携は必須である。
- ワークショップ形式の普及活動では、ファシリテーター(芸術の専門的な知識や経験を有し、参加者とコミュニケーションを図りながら積極的な参加を促し、ワークショップの効果を最大限に引き出すリーダーシップ的な存在)と呼ばれる専門的な人材の登用や育成も求められる。

5. 市民組織との連携 - 芸術普及活動の応援団づくり

- 芸術普及活動を実施するために市民組織と連携を図るケースもあるが、市民からの応援団的な組織があれば、アウトリーチ活動を推進する上でも有効である。
- しかし、特定の市民団体との関係が強くなると、広く市民に開いていくはずの普及活動が、かえって逆効果になりかねないことには留意が必要である。
- また、市民の活動が主体になるのではなく、あくまでも普及活動によって地域や市民にサービスを提供していく、といった姿勢を、ホールや美術館が市民と一緒に醸成していくことが重要である。

芸術普及活動の意義とこれからの地域文化施設の方向性

1. 芸術普及活動の効果と意義

- 芸術普及活動の効果や意義は、次の5点に整理できる。
 - (1) 地域や市民との新たなつながりと公共性: 芸術普及活動は、文化施設の間口を広げ、垣根を低くして、それまで関係の薄かった市民や地域との新たなつながりを生み出すなど、文化施設の公共性をより強固なものにできる
 - (2) 観客の開拓や育成: 芸術普及活動は、地域の文化環境を育み、結果的に劇場や美術館の観客を開拓、育成することにつながっていく
 - (3) 子どもや青少年に対する成果: 芸術普及活動は、現在の学校教育の枠組みとは異なる形で、子どもや青少年の健全育成や感性教育に大きな効果を有している
 - (4) アーティストや芸術団体にとっての新しい役割: 芸術普及活動に取り組むことによって、アーティストにも新たな社会的な役割が生まれ、そのことが芸術の社会的な意義や価値の理解に結びついていく
 - (5) 文化施設内部や行政組織に対する効果: 行財政改革や評価制度の導入など、文化施設を取り巻く環境が大きく変化する中で、芸術普及活動は、劇場・ホールや美術館に「市民」の側にたった運営を促し、文化施設の重要性に対する行政内部の理解促進にも効果を有している

2. 芸術普及活動とこれからの地域文化施設の方向性

- 地域文化施設を基点とした芸術普及活動の展開は、文化行政の枠組みにとどまることなく、教育や福祉、コミュニティ形成などをとおして、まちづくり、ひとづくりにつながっていく。
- 従来の文化施設は、芸術の享受者へのサービス(ホールの自主事業、美術館の展覧会)と自ら芸術活動をおこなう市民へのサービス(貸しホール、市民ギャラリー)という大きな枠組みの中で運営されてきたが、芸術普及活動はそうした文化施設の枠組みを取り払い、より多くの市民との関係性を構築できる可能性を有している。
- 芸術普及活動によって、芸術が本来持つコミュニケーション能力を活用し、社会とアート、市民とアーティストを結びつけることで、市民や地域の中に新しい交流や活力が生まれていく。
- 近年急速に整備の進んだ文化施設が、地域や市民にとって真に意味のあるものになるためには、今後、芸術や文化を軸に、地域のまちづくりやひとづくりに参画していくことが重要である。
- そうした視点に立つと、芸術普及活動は地域を創造する取り組みとして、これからの地域文化施設になくてはならないものである。